特色ある図版と記述から、疑問や問いが生まれます

本編113テーマ

■ 大きく鮮明な図版

一人ひとりの発見や疑問から授業が始まります。

■ 読みやすいリアルな文章

歴史の現場に引き込まれ、「なぜだろう」という問いが生まれます。

■ 多彩な地図・グラフ・側注

さまざまな面から考えを深め、授業展開を豊かにします。

■ 太字をなくす

主体的な学習を妨げる太字をなくしました。

予想される生徒の疑問や問い

生徒の関心を引き出す印象的なタイトル

「絵の人たちはどういう人たちだろう」
「何と言っているだろう」
「なぜ黒船を見にきたの？」
「望遠鏡は自分で持ってきたのか」
「何が見えたのだろう」
「黒船見物に行った女性は多かったのかなあ」

1 黒船を見物する人びと（「黒船来航風俗絵巻」埼玉県立歴史と民俗の博物館蔵）

（7）黒船を見に行こう ―ペリーの来航―

人びとはなぜ黒船見物に行くのだろう。黒船が来て幕府・大名はどう反応したか。

「福島の百姓が黒船を見に来た」
「菅野八郎はどういう人だろう」

2 黒船を描いた瓦版（横浜開港資料館蔵）

「同じペリーなのに、なぜいろいろな顔があるのだろう」

3 日本人が描いたペリーの顔（横浜開港資料館蔵・神奈川県立歴史博物館蔵）

「ペリーの目的は何だったのか」

「ペリーは沖縄に５回も寄港して条約を結んでいた。沖縄の人たちはどう考えていたのか」

ペリー艦隊の琉球（沖縄県）への来航
1853年４月，軍艦３隻で那覇に入港した。兵士を上陸させ，首里城を訪問した。以後，５回にわたって寄港し，貿易を認める条約を琉球王国と結び，石炭の貯蔵施設をつくった。

■ 大騒ぎの江戸

1853年６月，アメリカの使節ペリーが率いる軍艦４隻が，江戸湾の入り口，浦賀（神奈川県）にあらわれました。蒸気船２隻をふくむこの艦隊を，人びとは黒船とよびました。

これを知った江戸の人たちのなかには，一目，黒船を見ようと，浦賀まで出かける人が大勢いました。戦争がはじまるのではないかと，家族で逃げ出す江戸の町人もいました。さまざまな情報が手紙でやりとりされ，瓦版も多数発行されました。

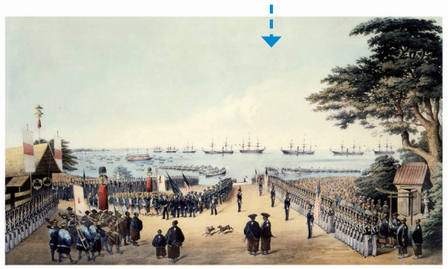
黒船の来航は全国に伝わりました。よく年，陸奥国（福島県）の百姓・菅野八郎は，神奈川（神奈川県横浜市）に出かけて，実際に見た黒船の威力や人びとの不安を書き記しました。

■ ペリー，江戸湾に侵入

アメリカは，1848年には，領土を太平洋側のカリフォルニアまで広げていました。日本を寄港地として，太平洋を横断する航路を開いて，中国に進出したいと望んでいました。また，灯油にする鯨油をとるために，多くの捕鯨船が日本近海で活動していました。

ペリーは琉球（沖縄県）に寄港したのち，日本に来航しました。江戸湾の中まで軍艦を進め，強引に上陸して，貿易を求める大統領の国書を幕府にわたそうとしました。幕府は，衝突を避けるため，湾内での測量

「兵士の整列が揃っている」
「通訳はどういう人がしたのか」
「なぜ犬がいるの？」
「幕府の役人や、見物している人はどんな気持ちだっただろう」



4 横浜に上陸するペリー（横浜開港資料館蔵）

「ペリーは半年以上かけて来た」
「なぜ太平洋でなく大西洋から来たのだろう」

5 ペリーの来航経路（年月日は太陽暦）

などをとがめませんでした。結局，幕府は国書を受け取り，よく年に回答すると約束しました。国書にどう答えるか，態度を決めかねた幕府は，朝廷に報告し，大名たちに意見を求めました。

ペリーは，1854年１月，今度は軍艦７隻で来航し，幕府と交渉をはじめました。モリソン号事件の例をあげ，漂流民の保護と貿易を求めました。交渉の結果，ペリーは貿易についてはあきらめ，日米和親条約を結びました。この条約で，下田（静岡県）・函館（北海道）の２港を開き，燃料・食料・水の補給と漂流民の保護を認めました。下田にはアメリカの領事館がおかれました。

■ 通商条約を結ぶ

1856年，下田に着任したアメリカの総領事ハリスは，幕府の役人と面談しました。ハリスは，イギリスの脅威が日本に近づいていること，貿易は両国の利益になることなどを述べ，強く説得しました。幕府は，中国（清）で軍事行動をとるイギリス・フランスの動きや，軍事力の差を考え，欧米諸国との武力対決を避けたいと考えていました。

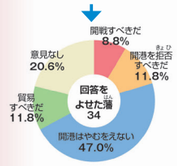
1858年，大老・井伊直弼が反対意見をおさえ，幕府は日米修好通商条約を結びました。この条約で，貿易港として５港を開き，居留地に限って自由な貿易を認めました。幕府は，ほぼ同じ内容の条約をイギリス・オランダ・ロシア・フランスとも結びました。

これらの条約によって，日本国内での外国人の犯罪は，外国の領事が，その国の法律によって裁判することになりました（領事裁判権）。また，日本側が輸入品の関税率を決める権利（関税自主権）はなく，協定で決めることとしました。日本にとって不平等な内容をふくむこの条約の改正が，以後の外交の大きな課題になっていきます。

井伊直弼が，朝廷の許可なく条約を調印したことや，将軍の後継ぎを独断で決めたことは，反対派から激しく批判されました。これに対して幕府は，80数名を処罰しました。さらに反発した水戸藩（茨城県）などの浪士は，1860年，江戸城の桜田門外で井伊直弼を殺害しました。

6 アメリカ東インド艦隊司令官ペリー（1794～1858）

「幕府が大名たちに意見を聞いたのはなぜだろう」
「自分だったら、開港に賛成か反対か、どう考えただろうか」



7 日米修好通商条約をめぐる大名の意見（『日本経済思想史研究』による）

「幕府が通商条約を結んだことは良かったのか」
「貿易が始まったら日本は貧しくなるのだろうか」
「井伊直弼は殺された。これから日本はどうなっていくのか」

開港する５港
神奈川（横浜）・函館・長崎・新潟・兵庫（神戸）

居留地
外国人が居住し，営業することを許した特別の地域。横浜や神戸などには，中国人も多く移り住んだ。